

52

華岡青洲の無名の弟子・小田順亭(魯庵)が 華岡流麻酔法を用いて行った手術の事例

金谷 貢¹⁾, 金谷 桂子²⁾

¹⁾新潟大学大学院医歯学総合研究科 生体組織再生工学分野, ²⁾周学館 新潟

華岡青洲による、世界初の全身麻酔は世界的に認められている業績である。しかし、一方では、「その方法を子孫や高弟にのみ伝授する傾向があったので普及しなかった。」という見方がされてきた。これに対して、松木明知は青洲門下生の業績発掘に努め、5名の門人の事例を発掘した。また、山内一信らおよび梶谷光弘らは父子の事例を各々報告した。

演者らは上記のほか、青洲の弟子としては無名に近い、豊後の小田順亭が華岡流麻酔法を用いて手術を行ったと考えられる事例を見いだしたので、原史料にも言及して報告する。

【小田順亭について】呉 秀三著『華岡青洲先生及其外科』門人録には、「豊後」欄に「天保四.六.一〇 日出倉成村木下大和守内 小田順亭」とあり、春林軒所属となっている。

順亭は寧ろ「魯庵(ろあん)」の名で知られている。「小田魯庵」の略歴や事績を載せている書籍は数多く存在するが、それらの中には出典が不明の記述も多い。そこで、その出典を調査したところ、出典を明記している記述も含めて、①彼の墓(大分県日出町松屋寺墓地の「魯田先生之墓」)の『墓誌銘』(『毛利空桑全集』に「小田子順墓誌銘」として収載)、②『帆足萬里全集』(全2巻)とその復刻版に新資料等を加えた『増補 帆足萬里全集』(全4巻)および③帆足紀念文庫編『帆足萬里先生略傳』、が大元の史資料として重要と考えられた。

次に、①、②-上(第1巻)の「帆足萬里先生小傳」および③を基に、彼を簡単に紹介する。順亭(魯庵)は速見郡倉成村高取の人であり、小田良珉の長子で、諱は健、字は子順、魯庵、魯田、通貞と号した。最初は帆足萬里の門下生となり、萬里の紹介で青洲の門下生となり修業した。その後、産科の香川(演者注 賀川が正しいと思われる)・奥両師に学び、帰郷して八坂中平村で開業し、豊後第一の外科医と称された。日出藩中士。明治4年3月2日、63歳で没した。法名は禄寿院嘯岩魯庵居士。没年より逆算して生年は文化6年となる。

【小田順亭が華岡流麻酔法を用いた手術事例】上記②-上(第1巻) p603には萬里作の次の七言絶句が掲載されており、同-第4巻, p476には弘化3年の作となっている。

「山妻患乳瘍、以鈎吻汞霜治之、已痊又發、小田生爲割之、賦謝、
痼毒多年著乳房、快刀割下似剝腸、論方怪爾巧過我、唯用一杯麻沸湯、」

いっぽう、演者らはこの漢詩の原史料を見いだした。上記を参考に活字化して示す。

「痼毒多年著乳房 快刀割下似剝腸 論方怪爾巧過我 惟用一杯麻沸湯
右家人患乳瘍以鈎吻汞霜治之已(または己)念又發 小田生爲割之全痊賦贈 萬里拜」

原史料と比較すると、全集から引用の2行目は「惟」が「唯」となっているほかは同じである。しかし、1行目は原史料とかなり違っており、重大な誤植が指摘されよう。

以上、この漢詩には、萬里の妻の乳瘍を順亭が全身麻酔薬である麻沸湯を用いて手術し治したことが記されている。また、上記②-第4巻, p173 収載の、萬里が吉井改邑に宛てた書簡に、「……老僕儀家内魯庵方ニ遣 乳瘍を割候て 以之外不快ニ付兩三日八坂ニ参候節 ……」とあり、順亭(魯庵)による萬里の妻の乳瘍の手術がここにも記されている。上の漢詩は上記②初刊収載なので少なくとも1926年から公表されているが、研究者の間では、「青洲門下生による華岡流麻酔法の普及を示す事例」としては言及されてこなかった。したがって、今回、「従来知られていなかった、青洲門下生による華岡流麻酔法の普及を示す事例」の一つを原史料を含めて発掘したと言っているのではないと思われる。

もう一例、上記①には、「……嘉永元年城主寝痔漏劇証先生力請乃令君運刀君積階下土城主果痊而東……」とあり、嘉永元年に日出藩第14代藩主、木下俊方公の痔を順亭が手術した旨が記されており、華岡流麻酔法が用いられた可能性が大きい、今回は裏付けが取れなかった。